

研究ノート

『ひのえうま』の死産について

坂井博通

1. はじめに

本論は子供の性別選好研究の一環として『ひのえうま』(昭和41年)の死産を扱うものである。『ひのえうま』のうわさは、男子選好を強化し、女子選好を弱化する説得的コミュニケーションと捉えることができ、死産はその影響を示唆する1つの人口行動であると考えられるのである。

さて、昭和40年から41年にかけての大きな出生減少は、人々が『ひのえうま』に影響を受けて、出産を差し控えたためであると解釈されている。そして多くの研究は、その原因を避妊を中心とした受胎調節が広く行われたためであると見ている¹⁾。

出産の登録が昭和41年となるのを防ぐには、避妊の他に、結婚時期の調節、出生届け月日の調節、人工妊娠中絶、死産などの方法が考えられる。出生の減少に関して、結婚による影響は6%、出生届出による調節は2%ほどであると主張されているが、概して、後の2つの方法に関してはその影響はほとんど無いとされている。その根拠は、人工妊娠中絶や死産数の年次変化に関して昭和41年に特に異常が見られないこと、つまり、変化が減少の動向にそっているということによる²⁾。

しかし、小野武雄³⁾は、昭和40年1月から41年の9月の人工妊娠中絶数の月別変化を検討して、昭和41年1～4月が前年同月よりも多い実績が見られることを示した。そして、その変化を『ひのえうま』の出産を避けようという行動を示すものかも知れないとした。

したがって、現在の研究状況では、『ひのえうま』に固有の死産があったかは統一見解がないということになる。そこで、本稿は、『ひのえうま』の死産のいくつかの側面に関して、年次的変化から見て統計的異常値(ひのえうま的異常)が見られないのかどうかを検討して、『ひのえうま』に関連して現実に死産があったか否かを知ろうとするものである。

ここで、人工妊娠中絶ではなく、死産を検討するのは、より細かなデータが入手可能なことによる。中絶の細かなデータも入手可能となれば分析する予定である⁴⁾。

2. 死産率の「ひのえうま的異常」

まず、「人口動態統計」に基づき、いくつかの死産率—年死産率、月別死産率、母親の年齢別死産率、出生順位別死産率—を検討する。従来の研究は、ひのえうまの前年、あるいは、翌年からせいぜい前後併せて5年間の動向の検討により行われている。しかし、時系列で考える際は、より長い期間を加味した方がよりよいと考えられるので、『ひのえうま』を挟む昭和30年から昭和50年までの21年

1) 伊藤達也,「同居児法による「ひのえうま」の出生変動の計測と分析」,『人口問題研究』,第181号,1987年, pp.31-33. の「ひのえうま」の研究のレビューを参照。

2) 前掲注1)を参照。

3) 小野武雄,「“ヒノエウマ”は生きている,出生児数減少にみるその迷信」,『大阪の統計』,第218号,1967年, pp.10-16.

4) 現在,昭和40年当時の月別人工妊娠中絶統計は入手不可能である。

間のデータを検討することにする。

時系列で見ると、母親の年齢が19、20—24、25—29、40—44、45—の死産率と第1子の死産率では、目立った特徴は見られないが、年死産率、月別死産率の各月、母親の年齢が30—34、35—39の死産率、第2、3、4子の死産率に異常が見られる。そして、その異常は、一般的傾向とは逸脱した大きな値を示すものである（表1～3）。

以上の結果は、比較的高年齢の夫婦に、『ひのえうま』の影響が相対的に多かったことを示唆する。

しかし、死産率は、ある一定時期の死産数／出産数で示される値であり、妊娠後の純粋な死産確率を表現するものではない。よって、死産率の上昇の原因が出生の相対的減少によるものか死産の相対的增加によるものであるかの判別は困難である。そして、周知のように、母親の年齢別の出生割合や出産順位別の出生割合の異常が41年に見られることから死産率の異常値は、死産格差を生む変数の出生数の変化が原因であるということも考えられる。

したがって、以上の結果からただちに、『ひのえうま』固有の意図的な死産があったかどうかは認識できない。よって、出生数の影響を受けることがより少ない指標でさらに考えて行く必要がある。

表1 年死産率と月別死産率

年次	年間	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
昭和30	95.8	73.5	90.8	96.8	92.6	103.1	101.9	103.3	101.2	101.9	95.1	97.4	102.7
31	97.1	83.2	93.3	99.4	97.7	102.1	98.4	100.7	100.6	99.3	98.9	95.0	100.8
32	101.2	83.5	97.2	103.0	97.6	101.4	98.4	101.9	107.3	110.0	111.1	103.9	106.1
33	100.7	84.8	95.5	99.2	93.9	102.7	102.8	106.4	108.6	110.2	104.7	101.1	104.7
34	100.6	86.0	96.0	97.5	89.6	100.3	106.2	107.9	107.1	109.1	104.8	104.8	106.6
35	100.4	85.6	99.6	95.8	90.4	100.3	105.8	107.4	106.0	107.2	105.2	105.4	103.1
36	101.7	89.1	96.5	100.9	94.6	103.7	105.2	104.6	107.2	107.8	108.4	106.6	100.3
37	98.8	87.1	91.5	96.4	95.2	102.1	106.8	101.1	103.2	104.8	101.0	102.9	97.7
38	95.6	83.8	94.5	98.0	91.2	98.6	100.8	99.8	98.4	98.5	98.4	97.1	91.4
39	89.2	84.4	91.3	89.4	86.5	89.6	91.0	90.8	90.1	90.5	90.0	90.9	86.6
40	81.4	79.9	81.8	82.0	81.1	89.0	88.4	84.0	79.8	77.0	76.8	78.8	79.8
41	98.2	95.2	100.4	101.8	96.7	100.2	100.6	99.1	99.1	103.9	101.1	96.9	86.5
42	71.6	64.5	70.9	69.8	70.5	69.8	74.7	69.4	74.0	75.2	75.0	77.3	71.6
43	71.1	69.5	73.5	75.4	67.8	71.3	70.9	68.7	70.9	71.9	73.6	72.9	67.4
44	68.6	64.2	69.0	68.5	65.3	69.7	68.8	68.4	67.6	72.8	75.2	71.6	63.8
45	65.3	64.4	69.9	68.3	64.6	65.3	64.6	64.1	62.0	68.1	69.8	63.5	59.4
46	61.4	60.6	63.3	65.3	62.0	61.0	63.7	59.5	58.3	61.6	61.6	61.5	59.1
47	57.8	58.2	60.8	60.7	58.7	58.9	59.6	56.0	56.1	57.1	57.5	58.4	52.6
48	52.6	53.1	55.7	56.2	52.4	52.7	54.2	50.0	51.6	51.6	52.7	52.6	48.7
49	51.3	51.4	55.1	55.5	54.1	54.5	52.0	48.0	47.5	48.8	50.1	50.6	48.4
50	50.8	50.2	52.9	54.1	51.1	51.5	51.2	50.3	49.6	50.1	51.5	49.9	47.8

資料) 厚生省統計情報部『人口動態統計』を用いて算出。

備考) 値は、死産数 / 出生数 × 1,000 である。

表2 母親の年齢別死産率

年次	計	母 親 の 年 齢						
		-19	20-24	25-29	30-34	35-39	40-44	45-
昭和30	29.9	46.2	29.2	26.5	29.9	39.4	53.5	65.7
31	30.9	47.9	30.4	27.8	30.6	41.3	57.2	71.0
32	31.4	50.2	30.6	28.5	31.9	40.9	58.3	82.7
33	31.3	52.9	30.9	28.0	31.9	43.4	62.6	91.9
34	30.7	51.9	30.2	27.7	30.9	43.5	64.6	103.2
35	29.9	51.9	29.9	26.7	30.5	44.2	64.7	88.1
36	29.4	53.7	29.3	26.3	30.5	43.4	68.7	89.2
37	27.8	54.1	27.5	24.8	29.5	43.2	62.2	82.7
38	26.2	50.6	26.2	23.2	27.6	41.5	68.6	109.1
39	23.9	46.6	23.4	21.2	25.6	38.8	61.5	111.1
40	21.7	44.9	21.2	19.4	22.7	36.1	61.9	124.1
41	22.1	42.8	21.1	19.3	23.7	36.9	58.6	102.4
42	18.6	35.3	18.3	16.2	19.6	33.9	55.5	70.5
43	16.9	33.6	16.7	14.7	17.9	29.4	51.0	89.6
44	15.9	31.8	15.7	13.9	16.8	27.9	49.5	99.6
45	14.8	27.3	14.6	13.0	15.7	26.1	43.7	88.2
46	13.9	26.6	13.6	12.1	14.7	25.3	44.6	80.6
47	12.7	23.1	12.2	11.1	13.8	23.2	45.1	71.7
48	12.0	21.2	11.5	10.5	12.9	22.5	41.5	81.3
49	11.2	20.2	11.0	9.8	12.2	20.8	39.4	73.9
50	10.5	17.1	10.1	9.4	11.6	20.2	39.7	61.8

資料) 表1と同じ。

備考) 死産数は、8月以上の死産数である。

表3 出生順位別死産率

年次	1子	2子	3子	4子
31	35.9	25.2	27.4	39.7
32	36.4	25.2	28.9	41.5
33	36.0	23.5	28.7	46.1
34	35.1	23.7	28.8	45.6
35	33.9	23.1	28.7	47.2
36	33.2	22.4	30.0	49.8
37	31.0	20.9	29.9	53.7
38	28.7	19.8	29.3	55.4
39	25.8	18.3	27.5	54.3
40	23.2	16.2	24.7	51.4
41	22.7	17.5	26.4	55.3
42	19.9	14.2	22.6	51.7
43	18.5	12.4	20.4	46.4
44	17.4	11.9	18.2	44.7
45	15.7	11.4	17.3	41.6
46	14.7	10.9	15.6	37.8
47	13.3	10.1	14.3	35.2
48	12.6	9.5	13.2	32.2
49	11.7	8.9	12.5	30.8
50	11.0	8.3	12.3	28.9

資料) 表1と同じ。

備考) 死産数は8月以上の死産数である。

3. 月別死産割合の考察

出生全体や、母親の年齢や出産順位別の出生による影響を受けにくいと考えられる1つの指標「月別の死産割合」をしてみることにする。死産に関しては出生よりも届け出月日をごまかす必要も少ないという利点も考えられる。

表4によると、昭和41年が上半期の死産48.86%、下半期の割合は51.14%と前後20年には見られない偏りを示している。特に41年の9~12月の死産割合が他の年に比べて大きい。これは『ひのえうま』の出産を避けようとしたためかも知れない。

つぎに、人工・自然死産別に見てみよう。半期ごとで見ると、人工死産は昭和41年に、特にめだつた値を示してはいない。むしろ昭和40年の下半期に割合が大きいこと(50.33%)が目につく。自然死産は、昭和40年が上半期に52.25%、下半期に47.75%、41年は上半期47.53%、下半期52.47%と特異な値を示している。したがって、昭和41年の半期ごとの死産の異常は自然死産の変化が大きく貢献していることがわかる。

しかし、これを月別に見てみると、人工死産は40年10月から12月にその月としては非常に大きな値を示している。また、41年の1月と2月も大きな値を示している。一方、自然死産については、人工死産とは対照的に、40年の11、12月が小さな値を、また、41年11、12月は他の年度にない大きな値を示している。

ところで、昭和40年の死産の妊娠月別割合を見てみると、人工死産については満12~27週の死産が

表4 月別死産割合(%)

(1) 総数

年次	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1-6月	7-12月
昭和30	8.7	8.6	9.2	8.2	8.3	7.3	8.3	8.7	8.6	7.9	7.8	8.4	50.27	49.73
31	9.0	8.7	9.6	8.6	8.3	7.5	8.2	8.4	8.2	8.1	7.6	7.9	51.70	48.30
32	9.0	8.6	9.2	8.3	7.9	7.1	8.1	8.6	8.3	8.4	7.9	8.5	50.15	49.85
33	8.9	8.2	8.8	7.9	7.9	7.4	8.4	8.6	8.7	8.5	8.1	8.5	49.21	50.79
34	9.2	8.6	8.9	7.9	8.0	7.6	8.4	8.5	8.5	8.2	7.9	8.3	50.19	49.81
35	8.7	8.8	8.8	8.0	7.9	7.6	8.5	8.6	8.6	8.2	8.1	8.2	49.86	50.14
36	8.7	8.2	9.0	8.2	8.1	7.5	8.3	8.7	8.6	8.4	8.1	8.2	49.75	50.25
37	8.9	8.2	8.8	8.3	8.2	7.7	8.2	8.6	8.7	8.2	8.0	8.1	50.12	49.88
38	8.7	8.8	9.2	8.4	8.3	7.8	8.4	8.5	8.2	8.1	7.7	7.9	51.19	48.81
39	8.9	8.6	8.7	8.3	8.0	7.7	8.5	8.4	8.3	8.2	8.0	8.3	50.21	49.78
40	9.0	8.3	8.8	8.5	8.5	8.1	8.6	8.4	8.2	8.2	7.6	7.8	51.18	48.81
41	8.7	8.3	8.6	7.9	7.7	7.6	8.4	8.5	8.7	8.5	8.4	8.6	48.86	51.14
42	8.8	8.7	9.2	8.4	8.1	7.9	8.1	8.6	8.3	8.1	7.9	7.8	51.17	48.82
43	8.6	8.3	9.0	8.2	8.3	7.7	8.4	8.5	8.3	8.4	8.1	8.1	50.16	49.84
44	8.7	8.3	8.6	8.3	8.5	7.9	8.5	8.2	8.6	8.7	7.9	7.8	50.24	49.76
45	8.9	8.6	8.9	8.5	8.3	7.8	8.6	8.0	8.5	8.5	7.5	7.8	51.06	48.94
46	8.6	8.1	8.9	8.4	8.2	8.3	8.5	8.3	8.5	8.3	7.8	8.0	50.54	49.46
47	8.7	8.5	8.7	8.3	8.4	8.3	8.4	8.6	8.4	8.3	7.9	7.6	50.88	49.12
48	8.8	8.4	9.0	8.3	8.5	8.3	8.3	8.5	8.1	8.2	7.8	7.7	51.36	48.64
49	8.8	8.5	9.0	8.8	8.9	8.2	8.4	8.2	8.0	8.1	7.6	7.5	52.06	47.94
50	8.7	8.4	9.0	8.5	8.6	8.1	8.7	8.4	8.2	8.3	7.4	7.7	51.23	48.77

(2) 人工死産

年次	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1-6月	7-12月
昭和30	[7.9]	8.6	9.4	8.3	8.4	7.2	8.5	<9.2>	9.1	[7.7]	7.7	8.1	49.81	50.19
31	9.0	8.6	<9.9>	<9.1>	8.4	7.4	8.3	8.6	8.5	8.1	7.1	7.1	52.33	47.67
32	8.7	8.6	9.4	8.5	7.9	[6.7]	8.2	9.0	8.8	8.5	[7.7]	8.0	49.80	50.20
33	8.4	[8.3]	9.0	7.9	7.8	7.3	8.7	8.8	<9.4>	8.4	7.9	8.0	<48.72>	[51.27]
34	8.9	8.9	8.8	[7.8]	7.9	7.6	8.7	8.8	9.0	8.0	7.7	7.9	49.87	50.13
35	8.4	9.2	8.9	7.9	[7.7]	7.5	8.7	8.9	9.1	8.1	8.0	7.7	49.45	50.55
36	8.5	[8.3]	9.2	8.3	8.1	7.4	8.3	<9.2>	8.9	8.3	7.8	7.8	49.73	50.27
37	8.7	8.4	8.8	8.5	8.3	7.5	8.2	9.0	9.1	8.1	7.9	7.5	50.14	49.86
38	8.2	9.0	9.4	8.6	8.2	7.6	8.5	8.7	8.7	8.1	7.6	7.4	51.02	48.98
39	9.3	8.8	8.8	8.4	7.8	7.4	8.7	8.2	8.7	8.1	7.9	8.0	50.49	49.51
40	8.9	8.5	[8.4]	8.3	7.9	7.7	8.4	8.4	8.6	8.5	<8.4>	<8.1>	49.67	50.33
41	9.0	9.1	8.9	8.1	7.8	7.6	8.5	8.5	8.8	8.2	7.9	7.5	50.55	49.45
42	8.8	9.1	9.4	8.2	7.9	7.7	[7.9]	8.8	8.7	8.0	8.1	7.4	51.07	48.93
43	8.6	8.7	9.2	8.2	7.9	7.5	8.3	8.5	8.5	8.4	8.2	8.0	50.07	49.93
44	8.4	8.5	8.7	8.5	8.4	7.6	8.7	8.0	9.0	<8.7>	8.1	7.4	50.13	49.87
45	9.0	<9.3>	8.9	8.6	8.2	7.4	8.7	7.8	8.8	8.6	7.3	7.4	51.47	48.53
46	8.8	8.4	9.2	8.3	8.0	8.3	8.4	8.0	8.9	8.2	7.8	7.6	51.05	48.95
47	9.2	8.9	9.2	8.4	8.2	<8.7>	8.2	8.5	8.3	8.0	7.5	[6.9]	52.56	47.44
48	<9.4>	9.2	9.1	8.4	8.3	8.4	[7.9]	8.3	[8.0]	8.1	7.7	7.1	52.77	47.23
49	8.9	9.2	9.2	8.9	<9.1>	8.0	8.1	[7.8]	[8.0]	8.2	7.3	7.4	<53.26>	[46.74]
50	8.8	8.7	9.1	8.6	8.4	7.9	<8.9>	8.3	8.6	8.4	7.2	7.3	51.48	48.52

(3) 自然死産

年次	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1-6月	7-12月
昭和30	<9.6>	8.5	8.9	8.2	8.2	[7.5]	8.2	8.2	7.9	8.1	8.0	8.8	50.79	49.21
31	9.1	<8.8>	<9.3>	8.1	8.1	7.7	[8.0]	[8.1]	7.9	8.1	8.1	8.7	51.03	48.97
32	9.3	8.5	9.0	8.2	8.0	7.5	8.0	8.3	[7.8]	8.4	8.1	8.9	50.50	49.49
33	9.3	8.1	8.7	7.9	8.0	7.6	8.1	8.3	8.0	8.6	8.2	9.0	49.70	50.29
34	9.5	8.3	9.0	8.0	8.1	7.6	8.1	8.2	8.1	8.3	8.1	8.7	50.50	49.50
35	9.0	8.5	8.8	8.1	8.1	7.7	8.2	8.3	8.2	8.3	8.2	8.6	50.23	49.77
36	8.9	8.1	8.9	8.2	8.2	7.6	8.3	8.3	8.3	8.5	8.3	8.6	49.76	50.24
37	9.0	8.1	8.9	8.1	8.1	8.0	8.3	8.3	8.3	8.4	8.1	8.6	50.10	49.90
38	9.2	8.6	9.1	8.3	8.3	7.9	8.4	8.3	7.9	8.1	7.8	8.2	51.32	48.67
39	8.6	8.5	8.6	8.2	8.2	7.9	8.4	8.6	8.1	8.3	8.1	8.5	50.01	49.98
40	9.1	8.3	9.1	8.6	<8.9>	<8.4>	<8.8>	8.5	7.9	[8.0]	[7.1]	[7.6]	<52.25>	[47.74]
41	8.5	[7.8]	[8.3]	[7.8]	[7.7]	7.6	8.3	8.5	<8.7>	<8.8>	<8.8>	<9.4>	[47.53]	<52.47>
42	8.9	8.5	9.1	8.5	8.2	8.0	8.2	8.4	8.1	8.1	7.9	8.0	51.23	48.76
43	8.6	8.1	8.9	8.2	8.5	7.9	8.5	8.5	8.1	8.4	8.1	8.2	50.22	49.78
44	8.9	8.1	8.5	8.3	8.5	8.1	8.4	8.3	8.3	8.7	7.8	8.1	50.30	49.70
45	8.8	8.2	8.9	8.4	8.4	8.1	8.6	8.2	8.3	8.4	7.6	8.1	50.81	49.19
46	[8.4]	7.9	8.7	8.5	8.3	8.3	8.5	8.4	8.3	8.4	7.8	8.2	50.26	49.74
47	[8.4]	8.2	8.5	8.2	8.6	8.1	8.6	<8.6>	8.4	8.5	8.0	8.0	59.99	50.01
48	8.5	8.1	8.9	8.3	8.6	8.2	8.6	<8.6>	8.1	8.3	7.8	8.0	50.69	49.31
49	8.7	8.2	8.9	<8.7>	8.7	8.2	8.6	8.4	8.1	8.1	7.7	7.6	51.50	48.50
50	8.7	8.2	8.9	8.4	8.7	8.2	8.7	8.5	8.1	8.2	7.5	8.0	51.10	48.90

資料) 表1と同じ。

備考) <>は同期間内の最大の割合を、〔 〕は最小の割合を示す。

97.6%と圧倒的に多い。他方、自然死産では同じ週の死産が59.6%であり、残りの40.4%はそれ以降の後期の死産である。

したがって、昭和40年10～41年2月の人工死産の割合の増加、昭和41年11月、12月の自然死産の増加はともに『ひのえうま』に出産を控えようとする行動であったと解釈することができる。また、自然死産の増加は、「優生保護法」のために人工死産扱いができなかった妊娠期間のものを記録上「自然」としたのではないかという可能性も考えられる。つまり、どちらも何らかの人為が働いたことが示唆される。

また、毎日新聞社「全国家族計画世論調査報告書」から「人工妊娠中絶を経験しなかった人の割合」⁵⁾をまとめて、母親の年齢別にみると、40年や44年よりも、42年に、その割合が少ない年齢層が多いことも、『ひのえうま』に関連して中絶を行った者がいることを示唆する(表5)。

したがって、『ひのえうま』を避けようとした死産は、確実にあったといえるのではないだろうか。

ところで、以上の結果から、『ひのえうま』の迷信を人が真に受けて中絶を行ったと解釈するのは早急であろう。もちろん、中にはそのような者や、家族や地域社会からの圧力を受けて中絶を行った者もいるだろう。しかし、そういう者だけではないだろう。

まず、意識的に『ひのえうま』を利用した者が考えられる。避妊に失敗した者や出産を希望しない者が、『ひのえうま』という合理的理由を見出して中絶を行ったのである。中絶を促進する働きを『ひのえうま』は持ったと考えられる。また、説得的コミュニケーションの研究結果⁶⁾(説得的コミュ

5) 本調査がサンプリング調査であること、また、「中絶の経験者」の方が「非経験者」よりも少ないこと、「不詳」も相当数あること等により、各回でモードを占める「非経験者」の割合を表した。

6) 水原泰介編、『講座社会心理学1』、東京大学出版会、1977を参照。

ニケーションは、既存の態度を正反対の態度に変えることは少なく、むしろ、あらかじめもっていた態度を強化する方向に働くことが多い) から考えても、『ひのえうま』は、産まない方に意見を変えたというよりも、あらかじめもっていた「当分の出産拒否」という態度を強化する方向に働いたと考えた方がよいであろう。

また、中絶以前の段階で、『ひのえうま』の影響を受けたが、中絶の際には影響を受けなかった者も考えられる。妊娠のタイミングの決定は、個人の合理的判断の他に、「社会比較」を通してなされる場合も多いと考えられる。まず、『ひのえうま』であることを意識して避妊を行う者が多くなったと考えられる。ここまでは、今までの出生数の減少の見解と同様である。

また、一旦避妊を意図して意図を強化した後の避妊の失敗＝妊娠は、単純に避妊を意図した場合よりも、中絶を行う確率がより高くなるということも考えられる。

したがって、妊娠のタイミングの1情報として『ひのえうま』が人々の出生の意思に影響を与え、避妊が例年になく強化されたということがあり、そのことが、出生減少の大半を説明するのは事実にしても、『ひのえうま』より喚起された避妊の意思強化が、かえって、中絶の確率を増加させたということもあるかも知れない。このような行動をたどった個人は、『ひのえうま』だから、子供を中絶したという意識は個人的には持っていないことになろう。

以上のように『ひのえうま』の死産には、個人が『ひのえうま』に影響された部分と『ひのえうま』を利用した部分が含まれているように思われる。現段階では、それらの数は明らかにしないが、次に行うべき課題は、『ひのえうま』が無かったならば行われなかったと思われる上記のような『ひのえうま』固有の死産の推定であろう。

表5 母親の年齢別「人工妊娠中絶を経験しなかった人の割合」(%)

年次	母親の年齢					
	20-24	25-29	30-34	35-39	40-44	45-49
昭和30	-	-	-	-	-	-
32	-	-	-	-	-	-
34	-	-	-	-	-	-
36	-	-	-	-	-	-
38	-	-	-	-	-	-
40	80.8	66.8	54.9	47.0	40.8	54.9
42	78.5	64.2	48.5	41.5	43.8	55.8
44	78.7	66.7	50.3	47.9	43.4	51.3
46	72.8	65.4	52.4	44.5	44.2	43.1
48	-	-	-	-	-	-
50	-	-	-	-	-	-
52	83.3	75.3	60.0	48.0	47.4	46.8
54	80.0	77.6	64.8	51.6	45.7	45.2
56	78.8	80.3	61.4	49.8	41.8	42.6
59	80.6	78.3	66.3	52.1	47.8	38.6
61	-	-	-	-	-	-

資料) 毎日新聞社「全国家族計画世論調査報告書」より。

備考) 一は、年齢別の割合が入手できなかったことを示す。